本当はヤバイ旧約聖書　どう見ても邪神です

鷹一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キリスト教信者（クリスチャン）でもない限り、（俺含む）日本人はあんまり読んだことない聖書。絵画や映画で出てくる、カッコいいシーンしか知らなかった。

物語として普通に読むとヤバイ神である。どう見ても邪神である。

神「オマエラあそこ行って全員虐殺してこい」（コレはひどい。ラノベ脳で読んでると、カナンの先住民が、盗賊に襲われるエルフ村にしか見えない）

特にやばそうなところをダイジェストにしてみた。

以前ネットで、「悪魔はこれだけしか人殺してないけど、神はこんなに殺してる」みたいな棒グラフをみたことあるけど、こんな内訳だったわけだ。

（挿絵予定）

物理本の厚さに引いてたが、ネット小説で鍛えられた今なら、ネットの電子版なら読めそう。

目　次

第一部（創世記）―――― 1
第二部（出エジプト記）―――― 5

第一部（創世記）

はじめに神は天と地を創造された。

（そうだったん？　「光あれ」が最初かと思ってたわ）

そして始まる6日間の大地の調整（テラフォーミング）。初日に「光あれ」で昼と夜、一日の時間単位ができるまで、それ以前の天と地の創造期間は定かでない。

多分4日目が一番大変。昼と夜、季節や年がわかるしるし（時計）のため、太陽と月、ついでに星を造られた。7日目はお休みです。

（時計かよ！）

神「俺様、星の名前全部言えるんだぜ。スゲーだろ」

（星が出てくるのはそれだけかよ！　星の立場低いな！）

「んー動物の世話めんどくせーな。ヒューム（人間）でも作るか。コネコネ。地面の土から作ったから、名前は『地面（アダム）』な。もういっこ作って、こっちは『命（エバ）』な」

地面（アダム）「ハイ」

命（エバ）「ハイ」

「オマエらヒューム（人間）は動物の名前でも考えてろ」

「そのへんの果物食っていいぞ。ただし冷蔵庫（真ん中辺りの木）のプリンは食うなよ」

（中略）

「テメー、オレは冷蔵庫（善悪）のプリン（実）（＊1）だけは食うなっつたよな！　聞いてなかったのか！」

アダム「つ、妻（エバ）が食べていいって…」

エバ「へ、ヘビ（＊2）が食べていいって…」

神「まずヘビ、オマエは手足なくしてによろによろしとけや。あとヒューム（人間）と敵対して踏まれてしまえ」

神「女（エバ）、まず子を産むの大変にしとくから。あとオマエに判断させるとろくなことしねーな。男（アダム）の言うことだけ聞いときゃいいんだよ。それが罰だ」

（コレが、西洋において男性が女性を支配する根拠に長いことなってたようだ）
アダム「あの、オレは？」
神「オマエには罰はない。ただ地面を呪って、ついでにトゲトゲ植物生やしといたから、こっから出たら苦労するかもな」
（地面と動物はとんだとばっちりである。すごい贔屓（ひいき）を見た）
「とにかく、さっさと出てけ！」
・・・
「ふーこっちは食われなかったみたいだな。念のため炎の壁で囲っとこ」
（挿絵予定）
「楽園追放」マサッチオ
修復前　修復後
後年になって付け加えられた葉を除去して、原画に戻した

（中略）
「あー、ヒュームの奴ら、俺の言うこと聞かねーし、子分はヒュームの女とキャッキャウフフとよろしくやって、子供までつくってるしよ。ムカつくわ。ヒュームなんか造るんじゃなかった」
「ただ、コイツは見所あるな。それ以外皆殺しな」
ザバーン。すべて洪水で押し流す。（ここは有名）
（挿絵予定）
「洪水」ミケランジェロ
（中略）
「ヒュームの奴ら、俺様に断りもなく文明なんか作りやがって。プチっとな」（ここも有名）
（挿絵予定）
「ハベルの塔」ブリューゲル
（中略）
「んーコイツも見所あるな。声かけとくか」

「我が力を貸してやろう。オマエの子孫が星の数ほど増えるように、これからオマエは『いと気高き父』と名乗るがよい」
「ただし包茎手術しろ」
「そしたら、子孫を繁栄させたるわ。頑張って子作りしろよ。オマエらだけな」
（中略）
とある王国に流れ着いた『いと気高き父』とその妻。妻は非常に美しかった。
「おい、その女は何だ」「妹です」
妹と聞いて、『いと気高き父』の妻に色目を使う王。そこに神が力を貸す。
神「おっとそこまでだ。人妻に手を出すのはご法度だな。払うもん払ってもらうか」
王「い、妹だったのでは……」
疫病でバタバタ死ぬ王国の民。（いや罰は民じゃなく王にしろよ）
王「ひ、ひー勘弁してください。なんでも払いますから」
美人局（つつもたせ）成功（一回目）。
（中略）
また別の王国に流れ着いた『いと気高き父』とその妻。
「おい、その女は何だ」「妹です」
妹と聞いて、『いと気高き父』の妻に興味を持つ王。そこに神が力を貸す。
神「おっとそこまでだ。人妻に手を出すのはご法度だな。払うもん払ってもらうか」
王「まだ色目すら使ってませんが……」
神「今回は、手を出す前に忠告させてもらった」
王「い、妹だったのでは……」
『いと気高き父』「実は妹で妻なんです。兄妹（＊3）で結婚したわけでして」「おにいちゃん……」
神「王妃も王女も侍女も召使も、王宮内の女という女は子を産めなくしてある。払うもん払ったら呪いを解除してやろう」

王「ひ、ひー勘弁してください。なんでも払いますから」
美人局成功（二回目）。
（中略）
時がたち、『いと気高き父』とその妻は子を産み、その子も成長した。
そして美しい妻と結婚する。
また別の王国に流れ着いたその子とその妻。
「おい、その女は何だ」「妹です」
妹と聞いて、しかし興味を持たない王。
「他国の王から聞いてるぞ。私と王妃の仲は良好でな。貴様の妻には絶対に手を出さない。絶対にだ」
美人局失敗（三回目）。
（中略）
そして『いと気高き父』の子孫と、神（＊４）との邂逅。暗闇での格闘。
「え、オマエ、オレ様見て死んでないの？　よっしゃマブダチな。『神に勝つ者』と名乗っていいぞ」
（え、普通は死ぬのかよ。『子孫を繁栄させる』っといて、死んでたらどうするつもりだったんだ？）
（中略）

第二部（出エジプト記）

その後、王国（エジプト）で一時は栄華を味わう『神に勝つ者（イスラエル）』とその子孫たち（以下『神に勝つ者（イスラエル）』の民）。

しかし時がたち、国王が変わり、他民族である『神に勝つ者（イスラエル）』の民を奴隷として扱うようになる。

「あーそういえば、子孫繁栄させたるて『いと気高き父（アブラハム）』と『神に勝つ者（イスラエル）』に約束してたの忘れてたわ。（２：２３）」

（神は見守ってるんじゃなかったかよ！　奴隷になってからもう王が何代か変わってるよ！）

王宮で育った男、マシャ（モーセ）。しかし彼は赤子の時に王女（パロの娘）に拾い上げられた奴隷の子であり、マシャ（拾われた者）と名付けられた。

（挿絵予定）

二コラ・プッサン

彼は長じたのちに出生の秘密を知り、奴隷を助けるために、思わず王国兵士を殺してしまう。逃亡生活を続けるマシャ（モーセ）。

かくして神は、『神に勝つ者（イスラエル）』の民の中から、たまたま神のいた場所に通りかかった運の悪いおっさん、マシャ（モーセ）に目を付ける。

「おい。俺様はオマエの先祖に約束した神だ。約束（カナン）の地に連れてってやるから、『神に勝つ者（イスラエル）』の子孫連れてこい。オマエがリーダーな」

「え、えっと、どちらさんで？」

「先祖（アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神）に約束した神だっってるだろ、先祖の名前も知らねーのかよ。そうだな、俺様なんでもできるから『何（ヤウェ）にでもなれる者』とでも呼んでくれ」

「い、いや、私、く、口下手なもので、とても民を導くなんて……」

「そんなん口（アロン）が上手い奴にやらせとけばいい―だろ。魔法（神の力）が使えるようにしてやって、奇跡の杖やるから、コレで奇跡（だまくらかして）を行って連れてこい。とにかくオマエがヤレ」

「でも……」

「オマエいい加減にしろよ。ブチコロすぞ」
（挿絵予定）
「Ｂｕｒｎｉｎｇ　ｂｕｓｈ」セバスチャン・ブルドン
（中略）
　そして始まるマシャ（モーセ）　ＶＳ　王国（エジプト）宮廷魔術師との魔法大戦。河は血になり、モンスター（カエルやイナゴ）が召喚され、疫病が流行り、空は暗闇となった。さらに、王子、王国全土の民の長子と家畜の長子が変死する。
　神の力により、王国（エジプト）の王は既に神に操られていた。
（挿絵予定）
「エジプト第七の災い」ジョン・マーティン
（挿絵予定）
「エジプト最後の災い」エラストウス・ソールズベリー・フィールド
　変死
「もういいから出てってくれ」
　かくしてマシャ（モーセ）は『神に勝つ者（イスラエル）』の民を連れ、約束（カナン）の地へと旅立つ。王国（エジプト）の民衆から略奪してから出ていくのは忘れない。
　この時、『神に勝つ者（イスラエル）』の民の家にしるしをつけ、その家は通り過（過）ぎ（越）、それ以外の家からすべて略奪しだので、彼らは毎年コレを記念（過）した（越）祭りをする。イエスが最後の晩餐やってるアレだ。
（挿絵予定）
「最後の晩餐」レオナルド・ダ・ヴィンチ
　過越祭り（略奪記念祭）の風景
（王国《エジプト》の民衆側から見るとヒドイ。「お頭（カシラ）、あの時は略奪でぼろ儲けでしたね」という山賊パーティみたいだ）
　しかし海辺に近づいた時に王国（エジプト）の追手が！　王は既に操られてるので、完全にヤラセである。マシャ（モーセ）が脱出したトコでワザと追いかけさせ、さらにギリギリのトコで助ける。
「見た？　見た？　今のカッコよかったろ？　こんなん俺様にしっかできねーだろ。コレで俺様の凄さが王国（エジプト）の奴らに分かったろ？」
（挿絵予定）
「Ｔｈｅ　Ｃｒｏｓｓｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｒｅｄ　Ｓｅａ」二コ

ラ・プッサン
（挿絵予定）
「Ｐｈａｒａｏｈ，ｓ　ａｒｍｙ　ｅｎｇｕｌｆｅｄ　ｂｙ　ｔｈｅ　Ｒｅｄ　Ｓｅａ」Ｆｒｅｄｅｒｉｃｋ　Ａｒｔｈｕｒ　Ｂｒｉｄｇｍａｎ
（神の凄さを見せつけるためだけのために、大地を荒らされ、王子と民の子と家畜の子が死んだ、王と王国は完全にとばっちりである）
（中略）
約束の地の近く。もちろん―先住民が住んでいる《カナン人、ヘテ人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人》。
神「オマエラあそこ行って全員虐殺してこい」
（コレはひどい。ラノベ脳で読んでると、カナンの先住民が、盗賊に襲われるエルフ村にしか見えない）
（中略）
「あ？　、ダレが偵察しろなんて言った？　俺様がいつそんなこと言った？」
「偵察に賛成した奴はダレだ？　オマエか？　オマエもか？」
「俺様が力を貸してやるつってんのに、勝手に偵察へ行ったってことは、俺様の力を信じてねえってことだな。ああ？」
「連帯責任で、全員４０年の放浪だ。約束の地へ行けるのは、偵察に反対したやつと子孫だけ。偵察に賛成した奴は野垂れ死ね」
（これもヒドイ。偵察は戦争の基本では？　という人間の理屈は神には通じない）
マシャ「え？　俺も？　４０年？　放浪？」
（モーセもとばっちり。この辺から、モーセが無茶ブリ上司の下の中間管理職に見えてくる。経験者は胃がキリキリしてくる）
放浪中「こんなハズじゃなかった」「王国の奴隷の方がマシだった」
「オマエが連れ出したせいだぞ」
マシャにぶー垂れる『神に勝つ者』の民。
マシャ「ちょ、おま、オレがどんだけ苦労してると。神に聞こえたらどーすんだよ」

神「聞こえてんぞ」「言った奴は死ね」どんどん減る『神に勝つ者(イスラエル)』の民。
（中略）
「もう放浪やめて、このへんで畑でも作って住めば都だよ」「肥沃そうだな」「んだんだ」
マシヤ(モーセ)「ちょ、おま、シーッ」
神「聞こえてんぞ」「言った奴は死ね」またどんどん減る『神に勝つ者(イスラエル)』の民。
（中略）
「あー腹減った」「ホント腹減った」「クソ不味い神の食物(マナ)しかねーし」またぶー垂れる『神に勝つ者(イスラエル)』の民。

神「ほー、腹が減ったと」「俺様が用意したメシが不味いと」「すまんな気づかなくて」「よっしゃ、オレ様がウマイモンを腹いっぱい食わせてやろう」
「やったーさすが神」「まさに神」「ステキ！　抱いて！」「肉だー」手のひら返す『神に勝つ者(イスラエル)』の民。

「もうおなかいっぱいだ」「こんなに食べたのは久しぶりだ」「肉だー」
「んー、聞こえんなー。腹が減ってたんだろ。もっと食べろよ。まだまだあるぞ。ホラ、俺様が食わせてやろう」
「ちょ、ン、ムググ……」　……　「パーン」　さらにどんどん減る『神に勝つ者(イスラエル)』の民。
（中略）
マシヤ(モーセ)「もうこれ以上、言うこと聞かない民を率いていくのは（心の声：もっとワガママな神(上司)の言うこと聞くのは）、私には無理です。いっそ殺してください」（血涙）
神「んー聞こえんなー」
無茶ブリ上司　言うこと聞かない部下
神と『神に勝つ者』の民に挟まれ、マシヤ(モーセ)の中間管理職な日々は続く。